

# 年 頭 に あ た っ て

第 57 代 会 長 大 石 重 成\*

会員の皆様、新年おめでとうございます。年頭にあって所感の一端を述べて新年のご挨拶といたします。

わが土木学会は、創立後 57 年目を迎えることになりました。この間諸先輩はじめ会員各位のご努力によって、逐次発展を続け、各種委員会等も活発な活動が行なわれ、会員も 3 万名を越えるに至りましたことは、ご同慶の至りに存じます。

近時、科学技術の進歩は目ざましいものがあり、経済の発展に伴って、この狭い国土に大型プロジェクトが次々に行なわれているさまは、壯観というべきでありましょう。敗戦後、零から出発したわが国の経済は 25 年にして、世界第 3 位にまで成長いたしました。しかし、この成長のはげしさが、今日の社会にいろいろの問題を、醸し出していることも、衆知のとおりであります。すなわち、公害、交通禍、過密、住宅難、環境破壊、等々であります。

土木技術者は人類の幸福や福祉の増進のために国土を開発する先兵であり、土木事業が人類におよぼす影響はきわめて大きく、その影響や効果について慎重に総合的に判断、対処して調和のとれた社会環境をつくることに努力せねばならぬと存じます。

土木は本来の体質が鈍重であって、簡単には物に動じない性格があります。これは長所でもあるが、同時に短所でもあり、この進歩変遷してやまない世相の中では、むしろ欠点ともいうべき面が多く、ややもすると他からおくれをとる傾向があると思われれます。

土木の初期時代は、水害を防いだり、食糧を得るための技術が主であったが、殖産興業をモットーとする工業の発展時代には産業の基盤づくりに重点が移り、産業優先時代から、今後は脱・産業 (post-industry) の時代へと移ってゆくでしょう。生産と人間の福祉とのかねあいが問題となっているのが、現在の日本の世相と思われれます。そうなると、土木技術者の性格も変ってきて、人間の福祉優先、環境保全、情報化といったことに関連する技術へと移ると思われれます。一つの構造物をつくるにも従来、経済的ということが優先しましたが、今後はさらに人間性を基盤にした修景的、安全、スピード等の総合的判断が要求されたのではないのでしょうか。

科学技術は、その進歩の過程で分化細分し、ますます

専門化してゆき、他の分野と孤立化する傾向があり、そしてそれらの細分化の境界領域をいかにするかというようなことが問題になってきます。土木技術者は、昔のような大型の人物が少なくなると、職人化してはいないか、という人があります。思い出されるのは、土木学会の初代会長古市公威博士の第 1 回総会での講演であります。博士はこの講演の中で、『本会の会員は兵卒にあらず即指揮者なり故に第一に指揮者たるの素養なかるべからず、而して工学所属の各学科を比較し又各学年相互の関係を考ふるに指揮者を指揮する人即所謂將に將たる人を要する場合は土木に於て最多しとす……』とっておられることは、今日改めて味わうべき言と思います。

しかしながら、specialist がないと科学技術の進歩はあり得ないし、われわれは specialist の面と generalist の面と両方が要求され、他の分野の工学や、法律、経済の知識まで要求されるようになってきました。システム化の問題が真剣に考えられなければならない所以と存じます。

次に、土木学会の最近の動きについて述べたいと思います。土木学会は従来アカデミックで、民間業界などと無関係であるという批判がありますが、会員の構成からいっても、学会はもっと体質を改めて、学問と実社会との融合の接点としての役割を果すべきと思います。各専門家の研究を実社会にフィードバックし、また民間企業も昔日の比でなく非常な進歩をしている今日、両々相俟って土木技術の進歩をはかるべきと思います。

土木界の将来の発展のために土木学会はどうあるべきかという問題について、企画委員会や理事会で討議された結果、新たにいくつかの委員会や懇談会が設けられ、活動を始めております。たとえば、原子力、海洋開発、海外活動、総合開発、水資源、電算機、さらに建設業やコンサルタントに関する問題等であります。

また、土木学会は各方面の分野の会員からなっておりますので、各専門分野のえい智を結集するには絶好の場と考えられますので、お互いにこの共同の場を利用すべきと考えます。

会員各位のご理解とご協力をお願いすると同時に、各位のご多幸な 1 年でありますことを祈念して年頭の辞といたします。

\* 正会員 工博 鉄建建設 (株) 社長